THE KYOTO UNIVERSITY MUSEUM

Newsletter No. 45

March 2019

京都大学総合博物館ニュースレター



「カメラが写した 80 年前の中国」展示風景（3 頁に関連記事）

平成 30 年度特別展紹介
　思考の肖像―美術と科学のダイアグラム 2
　カメラが写した 80 年前の中国―京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真 3
　文化財発掘 V 「発掘 乾山窯」 4
第 8 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム 5
「京都好博學！ UNIVERSITAS 京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 台湾」展報告 6
國立成功大學博物館との学術交流協定 7
國立臺灣大學博物館群との学術交流協定 7
総合博物館コレクション研究〈5〉
　瀬戸臨海実験所魚類標本―コレクションの全容把握を目指して 8
招へい外国人学者の紹介 10
研究資源アーカイブ通信〈15〉
　リニューアルされた京都大学デジタルアーカイブシステム Peek の利用 11
総合博物館日誌（平成 30 年 11 月～平成 31 年 2 月） 12

平成 30 年度　特別展紹介

思考の肖像　－美術と科学のダイアグラム

Portraits of Thought: Diagrams in Art and Science

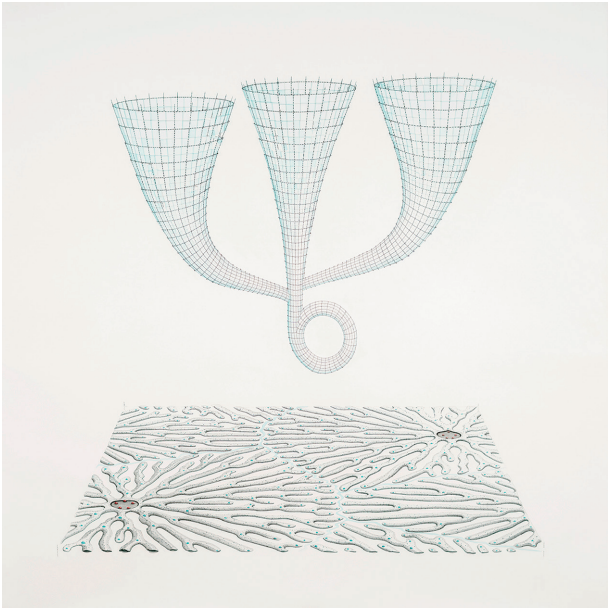
開催期間：平成 30 年 12 月 19 日（水）～平成 31 年 2 月 3 日（日）

2018 年 12 月 19 日（水）から 2019 年 2 月 3 日（日）まで特別展「思考の肖像：美術と科学のダイアグラム」（主催：「思考の肖像」展実行委員会）を開催しました。

ダイアグラムは線図や図表のことです。最古のダイアグラムは，石器時代に描かれた地図といわれており，今日では天気図や電車の路線図など広く日常生活に浸透している表現方法です。一方，科学者が自然現象や生命現象をどのようにとらえているのかを数式や文字以外で表現する手段として「バイオアート」や「感性科学」など科学と芸術の融合の表現について注目が集まっています。この展示を通して，ダイアグラムの持つ表現の可能性と「科学と美術の融合」について紹介することを目的にダイアグラム研究者であり，「科学と現代美術の融合の表現」をテーマに創作活動を行っているマイケル ウィッテル氏を中心とした実行委員会によって企画しました。

本展示は「エデン（Eden）」「ビックデータ（Big Data）」「思考の肖像（Portraits of Thought）」の 3 部で構成しました。「エデン」では，ダイアグラムを用いて科学を表現する初期の例として「智慧の樹（Tree of Knowledge）」（1751–1777）を象徴とし，20 世紀はじめの医学や生物学の教育掛図を展示しました。

「ビックデータ」では，自然界における近年の論理や発見についてのダイアグラムを展示しました。神の粒子と呼ばれている「ヒッグス粒子」の発見や「素数螺旋」の 1 つであるロバート・サックスが開発した「サックスの螺旋」など 11 点のモデルを展示しました。



マイケル・ウィッテル
「初源の根拠モデル（Model for first-causes）」（2018）

「思考の肖像」では，ウィッテル氏の代表作である「初源の根拠モデル（Model for first-causes）：ドーナツ状に閉じ込められたタイムライン曲線と自生する宇宙を示しているゴッド・リーモデルと神経細胞樹状突起のパターンシミュレーション」（2018）や制作活動を行うまで生化学者として研究に従事していた知識と経験を生かし，京都大学高等研究院物質－細胞統合システム拠点（iCeMs）の研究者と議論を重ねて制作した「青い花の静物画とハエ（Blue Flower still life with fruit fly）」（2018）などペンと水彩絵具を使用して制作したダイアグラム的絵画作品 35 点を展示しました。

週末には，ウィッテル氏によるアーティストトークや「智慧の樹」から発想を得た小中学生向けワークショップ「My 知識の樹の実で飾ろう！ナレッジツリー」（主催：滋賀大学学生企画プロジェクト talk@home）を開催しました。会期中は，芸術をはじめ科学や哲学を専攻する学生の来館者が特に多く「科学と美術の融合」に対する関心の高さが窺えました。



展示室の様子

（総合博物館 研究員　中川 千種）

平成 30 年度　特別展紹介

カメラが写した 80 年前の中国
―京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真

開催期間：平成 31 年 2 月 13 日（水）～ 4 月 14 日（日）

この度，京都大学人文科学研究所で戦後 70 年あまり，秘蔵されていた「華北交通写真」（一部未公開写真を含む）を，西日本で初めて展示することになりました。展覧会開催にあたっては，京都大学の総合博物館，人文科学研究所，東南アジア地域研究研究所を主幹機関としつつ，学外からは華北交通アーカイブ作成委員会，ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センター，一般財団法人日本カメラ財団，京都鉄道博物館の組織的協力をあおいでいます。

「華北交通写真」とは，戦前（1939–45），中国の北部・西北部一帯の交通インフラを管轄していた日中合弁の華北交通株式会社（以下，華北交通）による 3 万 5 千点あまりに及ぶ広報用ストック・フォトのことを指します。戦前中国にあった日系の国策会社で，自社用にストックしていた写真が，これほど完璧な状態で残っている例はほとんどありません。写真に描かれた被写体からは，現代の中国ですでに失われてしまった景観や風俗，建築のみならず，教育や医療などの変化をみることができるため，この写真群は貴重な文化資産としても評価していいと思います。

華北交通写真の一部は，2016 年に 1 ヶ月ほど，日本カメラ博物館 JCII フォトサロンで公開しましたが，その際，主催者の予想以上に多くの方々の関心を呼び，複数の新聞紙面にもとりあげられました。今回は，華北交通写真の所蔵機関での展示ということもあって，人文科学研究所の前身であった東方文化研究所がおこなった雲崗石窟調査の写真をあわせて展示し，また華北交通のグラフ誌『北支』『華北』に頻繁にとりあげられた華北民俗写真も中心的テーマのひとつにしました。ただ，スペースの関係で展示できない写真も多いことから，地域の特徴を写しだす（1）鉄道，（2）女性，（3）子供，（4）学校，（5）食と住居，（6）老いと医療，以上 6 つのカテゴリーを軸とした写真 450 点あまりを選定し，「華北交通写真プロジェクター展示」として閲覧いただく工夫もいたしました。

じつは，この写真群を公開するプロジェクトは，10 年近く前に始まったのです。当初から，世界の人びとにも閲覧できるようにと，ウェブ上でのオープンデータとして公開することが計画されていました。所蔵機関である人文科学研究所の理解のもと，華北交通アーカイブ作成委員会や ROIS-DS 人文学オープンデータ共同利用センターの尽力により，展覧会開催と同時に全写真データにアクセスできる「華北交通アーカイブ」（http://codh.rois.ac.jp/north-china-railway/）が正式公開されるにいたったことは，当初計画の意に沿ったものであり，まさに 80 年間の封印が解かれた思いでいます。



展示風景

また，この間の調査で，地元の京都鉄道博物館に，貴重な短編映画 2 本，「華北交通創業」（1939 年，制作：南満洲鉄道株式会社）と「華北交通社員生活」（1943 年，制作：華北電影股份有限公司）が所蔵されていることがわかり，この展覧会でも上映させていただくことになりました。この映像フィルムの上映によって，京都鉄道博物館も把握していなかった「音声」を復元できたことも成果のひとつといえましょう。

なお，本特別展開催にあたって，平成 30 年度全学経費（特別協力経費）および主催 3 部局の部局長裁量経費をいただきました。関係者各位に対して，あらためて感謝申し上げます。

参考：貴志俊彦・白山眞理編著『京都大学人文科学研究所所蔵　華北交通写真資料集成』全 2 巻（国書刊行会，2016 年 11 月，論考編総 335 頁，写真編総 443 頁）

（東南アジア地域研究研究所 教授　貴志 俊彦）

平成 30 年度　特別展紹介

文化財発掘 V
「発掘 乾山窯」

開催期間：平成 31 年 2 月 20 日（水）～ 4 月 21 日（日）

京都大学構内の遺跡から出土した埋蔵文化財の調査研究成果を紹介するシリーズ「文化財発掘」も 5 回目を迎えた。今回は，病院構内から出土した乾山焼に光をあてた展示を企画した。乾山焼は，尾形深省（乾山：1663 - 1743）によって生み出された江戸時代中期のやきもので，斬新な意匠と多彩な造形からなる乾山焼は，陶磁器の世界に新風を吹き込むことに成功した。京都西北部の鳴滝に窯を築き，のちに鴨川の東に位置する聖護院へ移動して，やきもの作りを継続する。病院構内の発掘調査で出土した乾山焼は，この聖護院窯に関わるものである。

今回の展示では，病院構内から出土した聖護院乾山窯に関わる出土品とともに，最初に窯を開いた鳴滝乾山窯出土品，乾山焼に技術が継承された押小路焼に関連する発掘資料，乾山の庇護者であった五摂家の一つ，二條家の邸宅跡の発掘調査で出土した乾山焼も陳列した。さらに，乾山焼の製作技法を解明するためにおこなわれた実験考古学の成果を加えて，展示を構成した。

乾山焼は，真贋を問わなければ 3000 点ほどが伝世していると言われている。このなかには，重要文化財に指定されているものもある。乾山焼は，現代の私たちを魅了する「美術作品」の一つであり，博物館・美術館での特別展示は繰り返しおこなわれている。

今回の展示では，このような伝世品は一切展示していない。発掘調査で出土した考古資料と実験考古学の復元品のみで構成されながら，「乾山」を冠した展示は，おそらく最初の試みであろう。展示した陶片や窯道具・窯部材は，ひいき目に見ても，伝世品がもっているような「美術作品」としての華麗さや美しさは持ち合わせていない。ならば，この展示は何を目指したのか。



病院構内から出土した乾山焼



病院構内出土の乾山焼製作に関わる窯および窯道具

鳴滝窯出土資料も聖護院窯出土資料も，いずれも失敗作として世にでなかったものである。それゆえ，それらはそこで，どのようなやきもの生産が実施されたのかを具体的に示す一級資料なのだ。両窯出土資料を見比べることで，鳴滝から二条丁子屋町を経て聖護院へと製作の場を変えていった乾山焼の実像をみることができる。幻とも言われた押小路焼も発掘調査による実物資料で，釉下色絵などの技法が乾山焼へと継承されていたことが明らかになった。「美術作品」としての乾山焼を生み出した製作現場の証拠品といえる「考古資料」が語りかけてくる乾山焼の実像を鑑賞していただくことが展示の目指したところである。

今回の展示では，法蔵禅寺，立命館大学文学部，同志社大学歴史資料館，京都市埋蔵文化財研究所に多大なるご協力をいただき，貴重な資料をお借りすることができた。関係各位に厚くお礼申し上げたい。大学構内の埋蔵文化財を紹介する本シリーズも 5 回目となったが，紹介したい調査研究成果が尽きることはない。文化財情報の社会的発信のあり方を模索しつつ，さらに充実した企画を立案して継続できることを願っている。

（文化財総合研究センター 准教授　千葉 豊）

第8回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム

平成30年12月17日(月) ～21日(金)

2018年12月17日から19日にかけて日本学術振興会研究拠点形成事業「若手研究者トレーニングワークショップ2018（Training Workshop for Young Researchers 2018)」，20日・21日にかけて同「第8回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム（8th International Symposium on Asian Vertebrate Species Diversity)」がラオス・ビエンチャンにて開催されました。このシンポジウムにはアジア9カ国（ラオス, 日本, 韓国, 中国，ベトナム，ミャンマー，タイ，マレーシア，インドネシア）から計121名の研究者や学生が参加しました。

トレーニングワークショップでは研究対象動物群ごとに5つのグループに分かれ，学生が中心となって動物採集・観察が行われました。最終日には発表会があり，各グループで定めた研究テーマに沿ってプレゼンテーションが行われました。三日間という短い期間ながら，いずれのグループも充実した研究成果を報告しました。各国の採集技術を交換することができたほか，同年代の若手研究者と過ごすことは互いによい刺激となりました。

シンポジウムでは特別講演を含め42人による口頭発表と11人によるポスター発表が行われました。発表内容は多岐にわたり，脊椎動物の分類・行動・生態・保全に至るまでさまざまでした。自らの研究と異なる分野の発表を聞くことは，視野を広げて考えるよいきっかけとなりました。質疑応答や小休憩の時間には，研究者同士で活発な議論が交わされました。



トレーニングワークショップの様子

このシンポジウムは日本学術振興会研究拠点形成事業の一環として京都大学総合博物館が拠点機関となり毎年開催されているもので，年を追うごとに交流の輪が広がり，参加国・研究者・研究分野のいずれもが拡充を続けています。第9回を数える来年度のシンポジウムは，ベトナム・フエにて開催される予定です。本シンポジウムを通し，アジア圏における脊椎動物種多様性の研究がますます発展していくことが期待されます。

（理学研究科 修士課程1年　松下 海）



ラオス国立大学で開催されたシンポジウムの参加者

「京都好博學！UNIVERSITAS 京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 台湾」展報告

開催期間：平成 30 年 12 月 15 日（土）～平成 31 年 2 月 24 日（日）

2018 年 12 月 15 日から 19 年 2 月 24 日にかけて，台湾の國立臺北教育大學北師美術館にて「京都好博學！UNIVERSITAS　京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 台湾」が開催された。これは，京都市内の 14 の大学ミュージアムで組織する「京都・大学ミュージアム連携」と会場館が共同開催したもので，各所属館が所蔵する 200 点以上の文化遺産を海外で公開する画期的な試みであった。京都大学総合博物館からは，台湾の原住民の工芸品やアクセサリーのほか，教材として収集された実験機器や生物，鉱物，考古資料の模型などを多数出品した。

「京都・大学ミュージアム連携」は，2011 年に文化庁文化芸術振興費補助金「文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業」の助成を受けて成立して以来，各大学が所蔵する文化遺産を広く展示公開することにより，京都という地域の文化的特性と，大学ミュージアムとしての特性と意義を明らかにすべく，スタンプラリーや合同展覧会，共同講座の開講など様々な活動を続けてきた。

2012 年度に，当館で初めての合同展覧会「大学は宝箱！―京の大学ミュージアム収蔵品展」を開催したのは記憶に新しい。以後，九州産業大学美術館，東北歴史博物館，沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館，同志社大学ハリス理化学館同志社ギャラリーで合同展を開催し，各地域の大学ミュージアムとの交流を深め，収蔵品の新たな側面に光をあててきた。

本企画は，こうした活動を国際的に展開させるべく，発案から 3 年をかけてついに実現した。ひとえに破天荒な計画を快諾し，共に奔走してくださった会場館の方々の熱意と，台湾・日本両国の温かい支援者のご協力の賜物である。

展覧会の 1 つめのテーマ「大学講堂」では，近隣大学の古い家具を利用して会場に教室を作り出し，教材として収集された模型や美術資料，生徒作品を展示し，日本の高等教育機関における科学やデザイン教育の様相をたどった。とくに当館出品の島津製作所製の模型は台湾の大学でも所蔵されており，共同研究の可能性を秘めている。2 つめの「京都生活」では，京都の古地図や生活道具，染織品や伏見人形など，京都のくらしを彩る様々な資料を展示した。3 つめの「異地探索」では，アイヌや琉球を含めた日本の考古・民俗資料とともに，戦前に台湾の民族研究や産業育成を目的に収集された原住民の手工芸品や衣装，また，当時京都大学が高雄に設置した演習林で撮影された写真や研究日誌を展示した。これらの台湾資料は初の里帰りであり，研究成果が期待される。

展覧会では，所属館の教職員によるギャラリートークや講演会を実施した。京都外国語大学の学生や当館の子ども博物館が現地の学生とともにワークショップをおこない，大学生同士の交流をはかった。

北師美術館は従来，美術館教育に熱心であり，日本との連携企画だけでなく，毎日の定時ガイドに加え，年代に応じたワークショップや教員向け研修会，文化講座など多数の関連企画を実施されていた。展示作業を終えると展覧会が完了したように錯覚してしまう私にとって，展覧会をフル活用して，情報発信と教育に取り組む北師美術館の在り方は，大きな刺激となった。

こうした大学ミュージアムの活動を通じて，両国の文化交流と相互理解が深まり，次世代へと受け継がれていけばと願っている。

（総合博物館 博物館研究員　和田 積希）



展示風景 1



展示風景 2

國立成功大學博物館との学術交流協定

平成 30 年 9 月 29 日（土）

2018 年 9 月，総合博物館は，2013 年に台湾の國立成功大學博物館との間で締結した学術交流協定を更新した。2014 年に京都大学 SPIRITS プログラムとして開催した「挑戦するアジアの博物館」や 2016 年に成功大學で開催された “University Museum Conference：The Triple Helix of Cultural Heritages of Sciences, Technology, and University” に，館長他スタッフが相互に参加し，交流を深めるとともに，2015 年 11 月から 4 ヶ月間，郭美芳先生を客員准教授に迎え，館蔵の台湾先住民俗資料の調査を共同で実施した。

本交流協定の最大の成果は，2018 年 12 月から翌年 2 月にかけて，國立臺北教育大學北師美術館において開催された京都・大学ミュージアム連携の合同展に，共同調査した資料の数々を出品し，里帰りを実現できたことである（展示の詳細は 6 頁）。郭先生は，共に展示作業にあたられ，すばらしい展示空間を創り上げられた。また，開幕時のギャラリートークでは，たくさんの来館者に向けて，当館の資料の魅力について熱心にご講演いただいた。両館の学術交流の成果を，台湾の市民と共有できたことは望外の喜びであった。3 月末には，一連の成果をまとめた台湾民俗資料カタログを刊行する予定である。



展示作業にあたられる郭美芳先生

現在，京都大学は，成功大學との大学間協定の締結に向けて準備を進めている。新しいステージにおいても，総合博物館と成功大學博物館との交流が，より一層実り多いものとできるよう努めていきたい。

（総合博物館 教授　岩﨑 奈緒子）

國立臺灣大學博物館群との学術交流協定

平成 30 年 12 月 14 日（金）

2018 年 12 月，総合博物館は，台湾の國立臺灣大學博物館群との学術交流協定を更新した。締結式は國立臺北教育大學北師美術館において開催される「京都好博學！UNIVERSITAS　京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 台湾」の開幕式に岩﨑奈緒子・京都大学総合博物館長が出席するのに合わせて，2018 年 12 月 14 日同美術館ロビーにおいて行われ，陳光華・國立臺灣大學圖書館館長・博物館群召集人と学術交流協定書に署名が交わされた。



陳光華・國立臺灣大學圖書館館長・博物館群召集人（左）と
岩﨑奈緒子・京都大学総合博物館長（右）

総合博物館と臺灣大學博物館群は 2012 年より学術交流をすすめている。2013 年 12 月には期間 5 年の部局間学術交流協定を締結し，収蔵資料のデジタル化と公開，シンポジウムの開催，研究者交流，社会連携を含めた博物館学の共同研究など，さまざまな事業を積極的に展開してきた。今回の協定更新にあたり，両博物館が将来にわたって協力関係を強固にすることの重要性が再確認された。

（総合博物館 教授　永益 英敏）

総合博物館コレクション研究〈5〉

瀬戸臨海実験所魚類標本
―コレクションの全容把握を目指して

京都大学瀬戸臨海実験所が和歌山県白浜の地に設置されたのは 1922 年であり，もうすぐ創立 100 周年を迎える。臨海実験所としては，東京大学の三崎臨海実験所，北海道大学の忍路臨海実験所に次ぐ歴史をもち，開所以来，海産動植物に関する系統分類学や生態学の研究拠点として活動を続けている。特に刺胞・有櫛・軟体・節足・毛顎・原索動物については，この分野の発展に中心的な役割を担っている。

実験所が面する田辺湾は，切立った崖に大小の入江を配し，暗礁や小島が散在する複雑な地形を有している。そのため多種多様な動植物の生息・生育を可能にしている。加えて，実験所周辺の海域は黒潮分枝流の影響を強く受けており，暖海性あるいは南方系の動植物の分布が特徴的である。紀伊半島を分布北限とする種も多く，南方海域からの漂流もあるため，生物の多様性がとても高い地域となっている。その多様な海産動植物の標本が，SMBL（= Seto Marine Biological Laboratory）のアクロニムで登録保管されている。本稿ではそのコレクションの一端，特に魚類標本とそれにまつわる研究者達について紹介したい。

瀬戸臨海実験所の魚類標本は，当該実験所に助手として勤務し，現在もなお多くの記載論文で引用され続けている「日本産魚類大図鑑」[*1] や「魚類図鑑 南日本の沿岸魚」[*2] の編者，著者として有名な荒賀忠一（あらがちゅういち）が標本の収集や管理を行っていた期間に発展を遂げた。標本はすべてホルマリン固定された液浸標本であり，そのコレクションの中には，荒賀らが採集，新種記載したノコギリヨウジ（*Doryrhamphus japonicus*）のタイプ標本など（図 1）他数十点のタイプ標本も含まれており，大変貴重なものである。しかし，1995 年に荒賀が退官してからは，無脊椎動物を専門とする教官が増え，魚類を専門に扱う職員が不在となった。そのためもあってか，海産無脊椎動物を中心に多数の標本を有する瀬戸臨海実験所のコレクションから，魚類の標本のみが 1995 年から 2000 年にかけて総合博物館と舞鶴水産実験所に移管された。この SMBL 魚類標本の総数は数百点に及ぶと思われるが，台帳の電子化が進んでいない上に記載漏れもいくつかあり，さらに行方がわからなくなっている標本が多数存在することも判明している。この状況を打開するべく，標本の全容調査を進めている。

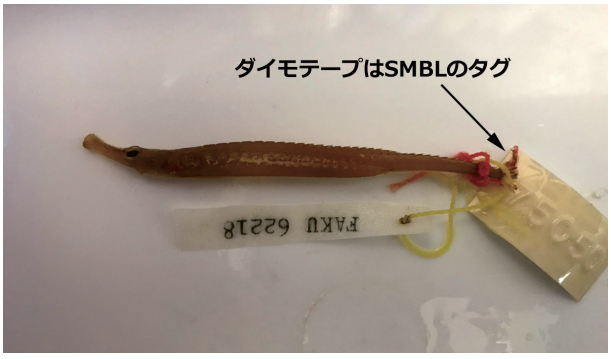


図 1：ノコギリヨウジの Holotype 標本

移管された標本の中には SMBL ナンバーのついていない標本（未登録標本）も数多く存在した。これらの詳細を紐解くと，和歌山における昭和初期の著名な研究者による標本が含まれていることが明らかとなった。上述のように和歌山県周辺は生息する生物の多様度が高く，江戸幕府内の御三家の一つ紀州徳川家の繁栄もあり，江戸時代後期には本草学や博物学が盛んな地であった。紀州本草学の先覚者で，1700 余品の動植物・鉱物を集録した「本草余纂」[*3] を著した小原桃洞（おはら とうどう）やその弟子で水産動物 735 種の形態や各地の方言などをまとめた日本最初の総合水産動物誌「水族志」[*4] の著者である畔田翠山（くろだ すいざん）がその中心である。この二人の功績により，紀州の地に本草学が発展し，博物学が芽吹く土壌が出来上がった。そこに生まれたのが南方熊楠（みなかた くまぐす）である。南方の業績はここで説明するまでもないが，その研究方法には畔田らが築き上げた紀州本草学の伝統が引き継がれている。

この南方熊楠の植物研究に多大なる貢献をしたのが宇井縫蔵（うい ぬいぞう）である。宇井は，田辺小学校や田辺高等女学校で教職にある傍，和歌山周辺の植物や魚類の蒐集研究を進め，「紀州魚譜」[*5] や「紀州植物誌」[*6] といった大著を完成させている。自身の植物研究を進めるにあたり，日本植物分類学の礎として知られている牧野富太郎（まきの とみたろう）とも交流があり，南方と牧野の仲立役も務めていた。宇井の名前はタケウツボ（*Strophidon ui*）やウイゴンベ（*Cyprinocirrhites polyactis*：記載当初は *C. ui*）などの魚種の和名や学名に



図 2：宇井縫蔵が収集した魚類標本



図 3：黒岩恒が採集した淡水魚標本

も残されている。 SMBL 魚類標本の中には，この宇井が収集した北海道産魚類の標本が含まれていることが判明した（図 2)。この宇井コレクションに関しては，京都大学白浜水族館の山内洋紀氏が中心となって，標本目録の作成に取り組んでいる。

また SMBL 未登録標本の中には，尖閣諸島の命名者としても知られる黒岩 恒（くろいわ　ひさし）が採集した標本も含まれていた。黒岩は前述の牧野富太郎とは 4 年上の同郷であり，植物の研究で交流があった。1892 年に沖縄師範学校に教諭として赴任し，1902 年には国頭郡各間切組合立農学校の初代校長となっている。教務の傍，沖縄周辺の動植物，自然地理の研究に邁進し，中央の学界に多くの標本を提供するとともに自らも多くの研究成果を残している。黒岩の名は，今もクロイワザサ（*Thuarea involuta*（Forst.）R.Br.）やクロイワゼミ（*Muda kuroiwae*）クロイワトカゲモドキ（*Goniurosaurus kuroiwae kuroiwae*）など複数の動植物に残されている。黒岩は 1920 年に沖縄を去った後，和歌山県瀬戸鉛山村（後の白浜町）に居を移し，東京帝国大学の嘱託を受けて数年間淡水魚の調査に没頭していたことが知られている。SMBL 標本から見つかったものは，黒岩がその短い期間に和歌山県内の河川で採集した淡水魚標本であることが確認できた（図 3)。これらの標本は保存状態が良く，学術的にも非常に価値の高い標本である。

本稿で紹介した SMBL 魚類標本コレクションは，標本瓶の劣化や保管状態の悪化から，完全に乾燥してしまったもの，標本の命とも言える採集情報が記されたラベルが失われたものも少なくない（図 4)。この状況を少しでも改善するために，乾燥状態からの復元やホルマリン固定標本からの分子解析などの再同定作業や採集記録の収集も進めている。これらの全容を明らかにすることで，SMBL 魚類標本は，幕末から昭和にかけての和歌山県における本草，博物学の源流をたどることのできる貴重なコレクションとなることを確信している。

（総合博物館 研究員　佐藤 崇）



図 4：劣化・破損した標本ビンとラベル

*1 益田一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫（1984）「日本産魚類大図鑑」東海大学出版会，和文解説 484pp, 図版 386pp.

*2 益田一・荒賀忠一・吉野哲夫（1975）「魚類図鑑　南日本の沿岸魚」東海大学出版会，379pp.

*3 小原桃洞（19 世紀：年月日不明）「本草余纂」.

*4 畔田翠山（1884）「水族志」文会舎，402pp.

*5 宇井縫蔵（1925）「紀州魚譜」紀元社，362pp.

*6 宇井縫蔵（1929）「紀州植物誌」高橋南益社，414pp.

招へい外国人学者の紹介
林 良恭（Liang-Kong Lin）客員教授



東海大学 特聘教授　招へい期間：平成 31 年 1 月 1 日（火）～ 3 月 31 日（日）

2019 年 1 月から 3 月まで京都大学総合博物館の客員教授に招へいされてとても光栄です。私が最初に総合博物館に来たのは 2001 年の訪問ですので，もう 18 年前のことです。今回は 3 ヶ月という短い滞在ですが，この機会を活用して総合博物館の本川雅治教授と協力しながら，有効に時間を活用して研究成果を分かち合うとともに，関連する課題について議論し，共同・協力関係を発展させたいと思います。

京都大学総合博物館は動物，植物，古生物学を統合し，地域や人文科学と関連した研究を発展させることのできる日本国内で屈指の高い研究水準をもつ機関です。今回は台湾に生息する陸生哺乳類動物誌（Mammals of Taiwan）のいくつかの巻の編纂と出版を本川教授とともに目指しています。第 1 巻の食虫目はすでに完成しており，第 2 巻の齧歯目を新たに出版する予定です。

生物多様性の重要な基礎研究として分類学があります。分類学的研究に用いる標本を取得し，標本制作と測量を行う上で，京都大学総合博物館は素晴らしい管理システムを持っているので，それについても学びたいです。また，台湾の哺乳動物の系統分類学や生物地理学を研究する上で，中国大陸や東南アジアの近縁種との比較も重要であり，それについても取り組んでいます。

東アジアに弧状に並ぶ島である台湾と日本は，地理的に接近していることから互いによく似た生態環境や島の動物相をもっています。陸上哺乳動物について見ても多くの種が日本と台湾に分布しており，その例としてはトガリネズミ科のカワネズミ（*Chimarrogale himalayica*），ジャコウネズミ（*Suncus murinus*），オオコウモリ科のクビワオオコウモリ（*Pteropus dasymallus*），ヒナコウモリ科のイエコウモリ（*Pipistrellus abramus*），ヒナコウモリ（*Vespertilio sinensis*），チチブコウモリ（*Barbastella leucomeras*），ネズミ科のカヤネズミ（*Micromys minutus*），オキナワハツカネズミ（*Mus caroli*），イタチ科のシベリアイタチ（*Mustela sibirica*），ネコ科のベンガルヤマネコ（*Prionailurus bengalensis*），イノシシ科のイノシシ（*Sus scrofa*），シカ科のニホンジカ（*Cervus nippon*）があげられます。今回の京都大学滞在では，これらの種に着目し，それぞれの種の多様性形成や進化の歴史を共同研究としてすすめると同時に，生物多様性保護につなげる方策を議論しています。



第 99 回 総合博物館セミナーでの発表

日本の動物学初期において，日本の研究者は台湾の哺乳動物の研究に深く取り組みました。青木文一郎，平坂恭介，堀川安市，徳田御稔，鹿野忠雄などが，多くの重要な研究成果を発表しました。中でも青木文一郎は台湾に生息するネズミ類の研究にその生涯をかけて取り組み。一方で京都大学の徳田御稔は台湾のネズミ類の生物地理について研究しました。こうした業績を記念するために，台湾の哺乳動物には日本の研究者の名前にちなんで命名されたものがあり，例えばキクチハタネズミ（*Microtus kikuchii*）やタイワンモグラジネズミ（*Anourosorex squamipes yamashinai*）が菊池米太郎と山階芳麿にちなんだものとしてあげられます。徳田御稔から台湾に生息する哺乳動物研究の歴史をもつ京都大学での滞在を通じて，過去の研究成果を振り返るだけでなく，未来に向けてさらに台湾と京都大学の学術交流や共同研究が発展することにつなげたいと思います。

私は現在，台湾の東海大学でプロボストを担当し，全学の教務関係の計画立案をになっています。京都大学に来てすぐに目にした山極総長が提出した WINDOWS 構想にとても敬服しています。台湾において，私たちの大学も同じように教育を重視し，そのための「2，3，4」とよばれる計画に取り組んでいるところです。それは卒業までに 2 つの言語を完全に習得すること，大学が教養（liberal arts），分野を超える（interdisciplinary），そして e-Learning の 3 つの教育課程を提供すること，全学の教員と学生が文化，社会，経済，そして環境の 4 つが永続的に発展することに投入すること，です。京都大学が進める様々な取り組みに触れることが，私の大学の発展にもつながると考えています。

研究資源アーカイブ通信〈15〉
リニューアルされた京都大学デジタルアーカイブシステム Peek の利用

京都大学研究資源アーカイブは，2018 年に京都大学デジタルアーカイブシステム（愛称 Peek）をリニューアルしました。ここでは新しい機能のいくつかを紹介します。

○ログイン利用

ログインしない「パブリックモード」とログインして利用する「研究者モード」を同じ機能にしました。後者は，教育研究関係者（または学内）だけで閲覧できるデジタルコレクションを用意しています。学術認証フェデレーション（学認 GakuNin）参加機関の発行する ID（京大では SPS-ID/ECS-ID）をお持ちの方が利用できます。京大以外では，ご所属の認証センターへ Peek 利用希望を出し，Peek を登録してもらってください。これまでよりも必須の情報を少なくしました。

○パーマリンク（ARK）

これまで Peek 内のメタデータやデジタルデータを特定するのにメタデータの資料番号を使って探していましたが，新たに永続識別子 Archival Resource Key（ARK）を採用しメタデータやデジタルデータへパーマリンクを付与しました。たとえば，本誌 No.39 記事「河合雅雄資料」9 ページの写真「E バンド，リーダー雄の採食」では，つぎのとおりです。

メタデータ：**https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar62321.35668**

画　像：**https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar62321.35668/do000277439.jpg**

「ar」直後から「.」までの数字がデジタルコレクションを指し，「.」以下の数字がそのコレクションに含まれるメタデータです。デジタルデータの場合，さらに「/do」と続け，デジタルデータを特定する数字とファイル拡張子を加えます[注 1]。

○映像再生

スマートデバイス（タブレットやスマートフォン等）でも映像が再生できるようになりました（Adobe Flash Player は不要）。映像の特定の部分から再生することもできます。たとえば前掲本誌 No.39 の同じく 9 ページの写真「ノートを出して記録する河合」（もと映画フィルムの 1 場面）は，つぎの URL であらわすことができます（再生ボタンを押すと当該場面から再生）。



映像再生の例（画面）

https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar62321.34531/do000238133.f4v#t=05:44

映像再生の例（QR コード）

○国際規格 IIIF（International Image Interoperability Framework）対応画像

Peek も IIIF へ対応しました。まだ対応画像は限られていますが[注 2]，これから増やしていきます。対応画像の ARK と IIIF での切り抜き例をつぎにあげておきます。

対応画像例: **https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/ark:/62587/ar20929.33225/do000437520.tif**

切り抜き例[注 3]:**https://peek.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/api/iiif/01/G0006503karchive/000/437/000437520_tiled.tif/920,520,1300,960/1080,/0/default.jpg**

IIIF 対応画像切り抜き例（QR コード）

[注 1] いまのところ「do」以下のデジタルデータを特定する文字列は，メタデータを表示した画面でブラウザの開発ツールやデベロッパーツールで当該サムネイル画像の位置から確認するしか入手の方法がない。末尾が「_ls.jpg」となるサムネイル画像のその末尾の文字列をとって，画像なら .jpg か .tif（IIIF 対応画像の場合こちら），映像なら .flv か .f4v か .mp4 を加えることで，当該デジタルデータの ARK 限定子（qualifier）部分となる。

[注 2] まだ「京都大学カラコラム・ヒンズークシ学術探検隊地質班関係資料」のルートマップ，「宮本正太郎資料」の火星スケッチ，「海老沢火星図」のみ。

[注 3] 画像リクエスト URI のうち prefix までが「.../api/iiif」となる。これに続けて注 1 でふれたサムネイル画像を表示させたときのブラウザ URL 欄「.../acv/cont」より後ろの部分を用い末尾の文字列をとって代わりに「_tiled.tif」とし，画像 API に沿った記載を加える。

（総合博物館 講師　五島 敏芳）

総合博物館日誌（平成 30 年 11 月～平成 31 年 2 月）

展示

▶平成 30 年度企画展
福井謙一博士生誕百年記念展示
「ノーベル賞化学者を育んだ教室 ―応用をやるには基礎をやれ―」
平成 30 年 10 月 3 日（水）～ 12 月 9 日（日）
- ギャリラリートーク
  11 月 3 日（土），11 日（日）
  田中勝久（福井謙一記念研究センター）
  11 月 17 日（土），25 日（日）
  田中一義（福井謙一記念研究センター）
  12 月 2 日（日），8 日（土）
  佐藤 徹（福井謙一記念研究センター）

［関連イベント］
- 折紙でまなぶ化学／ 11 月 10 日（土）
  山口之彦，久我香子ほか折紙同好会
- 著者と語る「化学者たちの京都学派」／ 11 月 16 日（金）
  古川 安（前 化学史学会長），佐藤 徹（福井謙一記念研究センター），鈴木哲也（京都大学学術出版会）
- 化学者と語る 90 年前の元素周期表／ 11 月 16 日（金）
  田中勝久（福井謙一記念研究センター），塩瀬隆之（京都大学総合博物館）
- 工業化学系学生向け説明会
  第 1 回 ／ 11 月 22 日（木）
  佐藤 徹（福井謙一記念研究センター）
  第 2 回 ／ 11 月 24 日（土）
  佐藤 徹（福井謙一記念研究センター）

［ミニ連携展示］
- 京都府立図書館／ 10月3日(水)～12月9日(日)

▶平成 30 年度特別展
「思考の肖像：美術と科学のダイアグラム」
平成 30 年 12 月 19 日（水）～平成 31 年 2 月 3 日（日）

［関連イベント］
- アーティストトーク／ 1 月 19 日（土）
  マイケル・ウィッテル
- My 知識の樹の実で飾ろう！ナレッジツリー／ 1 月 26 日（土）
  滋賀大学学生企画プロジェクト talk@home

「カメラが写した 80 年前の中国―京都大学人文科学研究所所蔵 華北交通写真―」
平成 31 年 2 月 13 日（水）～ 4 月 14 日（日）

［関連イベント］
- 公開ワークショップ「写真メディアからみるウチとソトのランドスケープ」／ 2 月 17 日(日)
  基調講演「写された風景をどう読み取るのか―米国に所在する戦後日本の写真を事例に―」
  佐藤洋一（早稲田大学社会科学総合学術院）
  フロアトーク「『カメラが写した 80 年前の中国』展の開催経緯と意義について」
  貴志俊彦（京都大学東南アジア地域研究研究所）

文化財発掘V「発掘 乾山窯」
平成 31 年 2 月 20 日（水）～ 4 月 21 日（日）

レクチャーシリーズ

- No. 151「なぜ時差ボケになるのか？―時間細胞の解析による時差症状改善法―」／ 11 月 10 日（土）
  山口賀章（京都大学薬学研究科）

総合博物館セミナー

- 第 98 回「霊長類の中で見る、寿命と性的二形」／ 11 月 9 日（金）
  佐々木智彦（京都大学総合博物館 特定准教授）
- 第 99 回「Life History of Taiwanese mountain vole (Microtus kikuchii)」／ 1 月 11 日（金）
  Liang-Kong Lin（東海大學生命科學系 特聘教授）
- 第 100 回記念「アジアの小型哺乳類の種多様性を探る」／ 2 月 8 日（金）
  本川雅治（京都大学総合博物館 教授）

イベント

- 第 7 回 京都・大学ミュージアム連携スタンプラリー／ 9 月 15 日（土）～ 12 月 8 日（土）
- 第 13 回 京都大学ホームカミングデイ／ 11 月 3 日（土）
- 第 16 回 関西文化の日／ 11 月 17 日（土）～ 18 日（日）
- 京都千年天文学街道 第 35 回 アストロトーク／ 12 月 15 日（土）
  「新惑星探し 160 年」
  作花一志 （京都情報大学院大学）
  「3D メガネでみる宇宙のすがた～リュウグウなどの小惑星や流星群と彗星のお話～」
  青木成一郎（京都大学天文台天文普及プロジェクト室／京都情報大学院大学）
- 「京都・大学ミュージアム連携出開帳 in 台湾」／平成 30 年 12 月 15 日（土）～平成 31 年 2 月 24 日（日）
- 日本学術振興会研究拠点形成事業「第 8 回アジア脊椎動物種多様性国際シンポジウム」／ 12 月 20 日（木）～ 21 日（金）
- 京都府立洛北高等学校附属中学校 3 年生プログラム「オーストラリア研修旅行報告（動物分野選抜総合班）」／ 1 月 10 日（木）
- 2018 年度 上廣倫理研究部門年次報告会
  「私たちの細胞を使う研究とルール」／ 2 月 2 日（土）
  「ヒト胚受精に対するゲノム編集技術 倫理的課題と規制」
  鈴木美香（上廣倫理研究部門 特定研究員）
  「ヒト胚受精に対するゲノム編集技術 意識調査計画の紹介」
  赤塚京子（上廣倫理研究部門 特定研究員）
  「動物性集合胚研究 倫理的課題と規制」
  澤井 努（上廣倫理研究部門 特定助教）
  「動物性集合胚研究 意識調査の結果」
  八田太一（上廣倫理研究部門 特定助教）

［ロビー展示］
- 「本庶 佑 特別教授 ノーベル生理学・医学賞受賞速報」／ 10 月 11 日（木）～ 12 月 9 日（日）
- 「大地は語る 2018 ～地球も宇宙もつかんでこ～」／ 11 月 18 日（日）
  理学研究科地質学鉱物学教室との共同開催

入館者数

11,576 名（うち特別観覧：47 団体 3,239 名）

発行日　2019 年 3 月 29 日
編集・発行　京都大学総合博物館　電話　075-753-3272
〒 606-8501　京都市左京区吉田本町　FAX　075-753-3277
http://www.museum.kyoto-u.ac.jp/